

*** キリスト教学特殊講義 * * * * ***

S.Ashina

第一章:文化から自然へ第二章:自然神学の諸問題序:キリスト教思想と自然の問い - アインシュタインの宗教論を手がかりに -第三章:キリスト教思想と環境倫理

EXKURS 2:ティリッヒとエコロジーの問題

3:P・ティリッヒの科学論とその現代的意義 10/29, 11/5

第四章:近代科学とキリスト教

1:近代キリスト教の歴史的状況

2:神学者ニュートンと自然神学

3:ニュートン主義と理神論

4:キリスト教の合理性をめぐって

3:ニュートン主義と理神論**4:キリスト教の合理性をめぐって**

1. ニュートン神学とその展開(理神論、アリウス主義、ユニテリアン)
2. 能動的物質という概念はまっすぐに無神論に至るであろうというのがニュートンの見解であった。18世紀の哲学者たちはニュートンの物質論にもっとも根本的仕方で挑戦した。……18世紀の思想家にとって、まさに物質の概念はニュートンが物質から分離しようとした力へと集中するものとなった。その結果はニュートンが予言した通りであり、そのうちに力を組み込んだ能動的物質の概念はまっすぐに無神論へとむかったのである(Dobbs&Jacob[1995], p.59)
3. キリスト教の合理性:ロックとトーランド
ロックの信仰論
4. 信仰:神による恩恵の賜物であるが、具体的には、教義的命題に対する知的な同意(faith as assent)
「イエスがメシアであることを信じることと悔い改めることとは、恩恵の契約の必然的で根本的な二つの部分なのである」(Locke[1695(1999)], p.111)
5. 不可視的で永遠かつ全能の神、天と地の創造者などを信じるのが現在と同様に以前にも要求された(ibid., p.22)
6. 信仰と悔い改めの二つのもの、すなわち、イエスがメシアであると信じることと良き生活は、永遠の生命を獲得しようとする人々によって実行されるべき新しい契約の必要不可欠の条件なのである(ibid., p.112)
ロックとトーランドとの一致点(1)
7. 信仰の「単純さ」:「神の存在」と「キリストのメシア性」

「この悔い改めが何であるかは、聖書において明白である」(ibid., p.111)

8. イエスが彼の弟子たちに信じるように勧めたことを、我々はすでに見てきた。イエスと彼の使徒の説教とを、一步一步、4福音書と使徒言行録の歴史を通して、そのすべてを吟味することによって(ibid., p.121)
宗教における著述家と論争者は宗教を精妙なもので満ち、観念で飾り立てている。こうした観念を、彼らは宗教の必然的で根本的な部分であるとしているのである。それはあたかも、アカデメイアやリュケイオンを通る以外に教会へ入る道はないかのごとくである。人類の大多数は学問や論理、また学派のあまりに細かな相違などにかまう暇などないのである(ibid., p.169-170)
貧しい者が彼らに説教された福音を持つということは、キリストが自らの宣教の特徴であり本分としたことなのである。……もし、貧しい者が彼らに説教された福音を持っているとするならば、疑いもなく、それは貧しい者が理解できるような、平明で理解可能なものであった。そして、我々が見てきたように、キリストと使徒の説教において、福音とはそのようなものなのである(ibid., p.171)
9. 「平明かつ理解可能」=「キリスト教の合理性」
「哲学的な諸体系を理解するとは思われない貧しい人も、キリストのわかりやすい説得的な教えと学者の難解で効力のない大演説との違いをすぐに理解したのである」(Toland[1696], p.xxi)
ロックとトーランドの一致点(2)
10. トーランド『非神秘的なキリスト教』: 哲学的な理性論・認識論(ibid., p.1-24)
11. わたしは、認識、知覚、肯定、否定、考察、意志、欲望といった諸観念と、心の他の作用すべての諸観念を形成する(ibid., p.10)
観念という言葉によって、わたしは心が思惟するとき心の直接対象となるものを、あるいはいかなる事物に関してであれ、心が包含する思想のことを理解している(ibid., p.11)
我々が事物の概念や観念をもたないとき、それについてはまったく推論できない。もし、我々が持っているのが媒介的な観念であり、それらが観念の恒常的で必然的な一致あるいは不一致を示すことができない場合には、我々は蓋然性を超えて進むことはできない(ibid., p.14-15)
知識に到達したとき、わたしはそれに伴う満足を享受し、蓋然性しかもたないところでは、判断を中断する(ibid., p.15)
この不可謬の規則、すべて正しい信念の根拠は、証拠である。そしてそれは、我々の観念あるいは思惟とその対象あるいは我々の思惟する事物との厳密な一致に存している(ibid., p.18-19)
12. 明晰かつ判明な観念あるいは我々の共通概念と明らかに矛盾するものは理性に反している。それゆえ、わたしは、福音の教理は、もしそれが神の言葉であるとするならば、理性に反するものではあり得ないということをこれから証明しよう。……わたしが現在知っているキリスト教徒は、理性と福音とが相互に矛盾しないとはっきり語っている(ibid., p.25)
もし、新約聖書の教理が理性に反するとするならば、我々はその観念を少しも持つ

ことができない(ibid., p.28-29)

13. 「明晰で自明な理性の指示に反して(contrary to)、それと矛盾するいかなることも、理性に関係のない信仰の問題として、奨励されたり、同意されたりする権利をもたない」(Locke [1690], p.696)。「Credo, quia impossibile est. <不可能なるゆえに、我信ず>ということは、善良な人においては、熱心を示す警句として通用するかもしれないが、しかし、人々が意見や宗教を選ぶためにはきわめて悪い規則であることがわかるであろう」(ibid.,).

ロックとトーランドの相違 - ロックは理神論者か? -

14. 理性について先に述べたことによって、我々は事物を、理性に従うもの(according to)、理性を超えるもの(above)、理性に反するもの(contrary to)、へと区別することについて、一定の推測を行うことができるかもしれない。1. 理性に従うものとは、次のような命題である。すなわち、その真理が、感覚と反省から獲得する諸観念を吟味また追求することによって発見可能であり、また自然の推論によって、真であるか、蓋然的であるかを見いだすことができるような命題である。2. 理性を超えるものは、次のような命題である。すなわち、その真理や蓋然性が、理性によって、今挙げた諸原理から導出できないような命題である。3. 理性に反するものとは、我々の明晰で判明な諸観念と矛盾あるいは調和しないような命題である。こうして、神の存在は理性に従い、一つ以上の神の存在は理性に反し、死者の復活は理性を超えているのである(ibid., p.687)
15. 我々は、福音の中には理性に反したり、理性を超えたものは何もないと、そしてキリスト教の教義は固有の意味では神秘と呼ぶことができないと主張する(Toland [1696], p.6)
- 我々の理性の完全性と健全さは我々にとって明白であり、またそれらは明らかに聖書に含意されているのだから、我々は成功についてのより自信に満ちた希望をもって、知識の獲得のために働くべきである(ibid., p.62)
- これで、キリスト教がいかにして神秘的になったか、また神的な制度がいかにして聖職者と哲学者の技巧や野望を通して単なる異教へと墮落したか、を示すに十分である(ibid., p.163)
- このようにわたしは他の者に対して、わたしが自ら十分に確信している次のことを示そうと努力してきた。つまり、キリスト教あるいはもっとも完全な宗教には神秘は存在しない、また、結論として、もしそれがほんとうに神の言葉であるとすれば、福音には、信仰箇条とされたものであっても、矛盾したり想像も及ばないものは含まれていない(ibid., p.170)
16. 真のキリスト教徒は、わたしが啓示を弱めたり混乱させるためにではなく、それを確証したり解明するために、理性を用いるのを見ても、もはや立腹させられることはないだろう(ibid., p.vii)
- わたしが示したいと願うことは、宗教における理性の使用は、一般に指摘されているほど危険ではないということである(ibid., p.vii)
- わたしは、無神論者とすべての啓示宗教の敵に対して、神的啓示の真理を論証する(ibid., p.xxiv)
17. 「蓋然的認識の蓋然性を評価し、啓示内容の妥当性を確立するのは理性の課題である

(Locke[1690], p.687)。「信仰は最高の理性に基づく同意に他ならない」(ibid, p.668)。
すべての必要な環境から得られる啓示についての不可謬の証拠に加えて、我々はその主題の中に神的知恵と健全な理性の論駁できない性格とを見なければならない
(Toland[1696], p.41-42)。

それゆえ、永遠はこの点で理性を超えている(above reason)とか、あるいはその観
念を汲み尽くせないのは我々における敗北であるとか、言うことはできない(ibid.,p.80)。

18. 『キリスト教の合理性』への弁明

そしてこの説をトランドは、ロックの認識論に結びつけて考えた。すなわちいわゆる
「啓示」は、内外の「感覚」と同じく、それ自身で知識を与えず、それに理性的
反省が加わってはじめて知識になる、と説いたのである。この点もロック説を一步
外に踏み出したものであった(野田[1985], p.127)

理神論者に対する『キリスト教の合理性』の回答は、理神論者の提起した問題に対
する共感の程度と、キリスト教の諸局面についてのロック自身の懐疑に対する彼の
解決の試みとを反映しているかもしれない。彼の結論のいくつかは、あとから考え
てみれば、理神論への方向へ一步を示すものかもしれないが、それはロックの意図
ではなかったように思われる(Higgins-Biddle[1999], p.xxxvii)

5 : むすび - ニュートン主義と自然神学の運命 -

19. ヒュームは、『自然宗教に関する対話』(*Dialogues concerning Natural Religion*, 1779)
クレアンテス(理神論者)、フィロ(懐疑論者)、デメア(有神論者)

20. しかし、もし我々が立ち止まり、またそれ以上進まないのとするならば、な
ぜここ(自然の制作者:論者補足)まで進むのか。なぜ物質世界で立ち止まらない
のか。無限に進むことなしに、どうして我々は満足できるのか(Hume[1779(1993)],
p.63)

世界は時計や織物機よりも、むしろ明らかに動物や植物に類似している。それゆえ、
より蓋然的なこととして、世界の原因は後者の原因に類似しているのである。後者
の原因とは産出と生長である(ibid., p.78)

21. 懐疑主義、多神教、有神論といった諸体系を、君は君の原理に基づいて、すべて似
た土台に立つものと認めねばならない。また、これらのどの一つも他のものに対し
て有利な点を何ら持たないことを容認せねばなるまい(ibid., p.77)

22. 「哲学的な懐疑論者であることは、一知識人にとって、健全な信仰を持ったキリスト教徒
であることに向けての最初のそしてもっとも本質的な一步なのである」(ibid., p.130)

23. ア・プリオリな論証が大いに説得力を持つのは、次のような人以外に対してはまれなこと
となってしまった。それは、抽象的な推論を行うのに慣れた形而上学的な頭脳の持ち主
であり、また数学において、悟性が曖昧さを通り抜けて、最初の外観に反して、しばしば
真理に至ることを発見し、同じ思考習慣をそれが適応されるべきでない主題に転用した
人々である。他の人々は、良識を持ち、宗教的傾向を最も有している人々でさえ、おそら
くはどこに欠陥があるかを明確に説明できないとしても、このような論証に欠陥を感じる
のが普通である。これこそ、人々が彼らの宗教をこの種の推論とは別の源泉より引き出し
てきたし、また引き出すであろうことの確かな証拠なのである(ibid., p.94)